

マルチメディア放送の在り方に関する 携帯ベンダーとしての提案

パナソニック モバイルコミュニケーションズ(株)

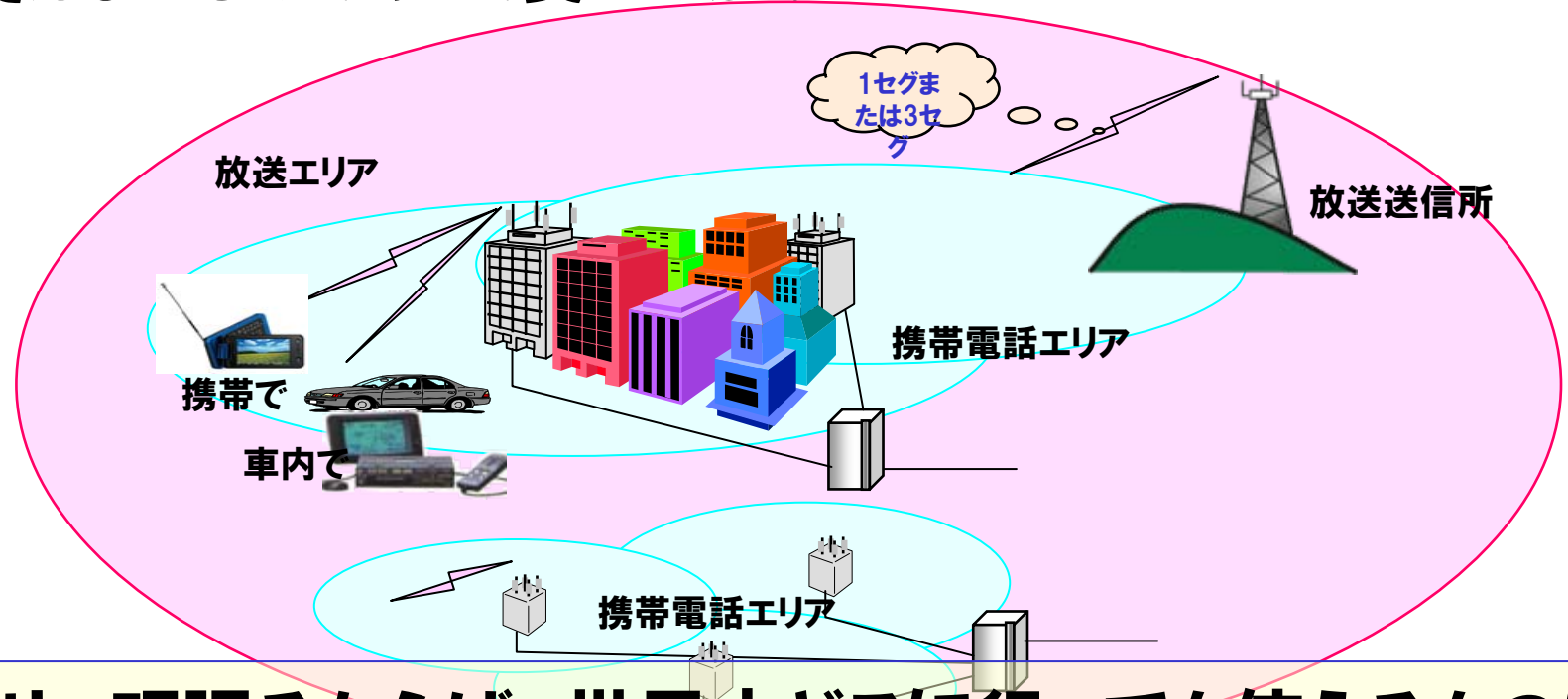
1. ICT国際競争力施策との整合性
2. 経済性
3. 国民の安心・安全への寄与
4. 周波数の有効利用

- かつて、携帯電話の世界では、圧倒的に周波数利用効率が良いにも関わらず、PDC方式はGSM方式に負けた
- デジタルテレビジョン方式及び移動体向けデジタル放送方式も、大部分の国々は欧州方式になりつつある
- 1セグメント放送を目玉に戦いを挑んでいるが、基幹放送分野においては、「おまけ」の位置づけ
- 新たな放送ジャンルであるマルチメディア放送でも同じ轍を踏むか日本に閉ざされた方式で甘んじるか

携帯電話単体で、世界市場において一定レベルの参入を果たすためには、単独機能だけでは勝てない。
放送も同様のことが想定され、国際競争力を高めるためには相互の密なる連携が重要で、日本が得意とするAV技術を武器にしなければならない。
現在、ARIBのデジタル放送国際普及部会 (DiBEG) を中心に南米及びアジア諸国にISDB-Tの採用を働きかけ中であり、国の施策としての整合性が必要と考える。

1. ICT国際競争力施策との整合性 **なぜ国際的視点が必要か？**

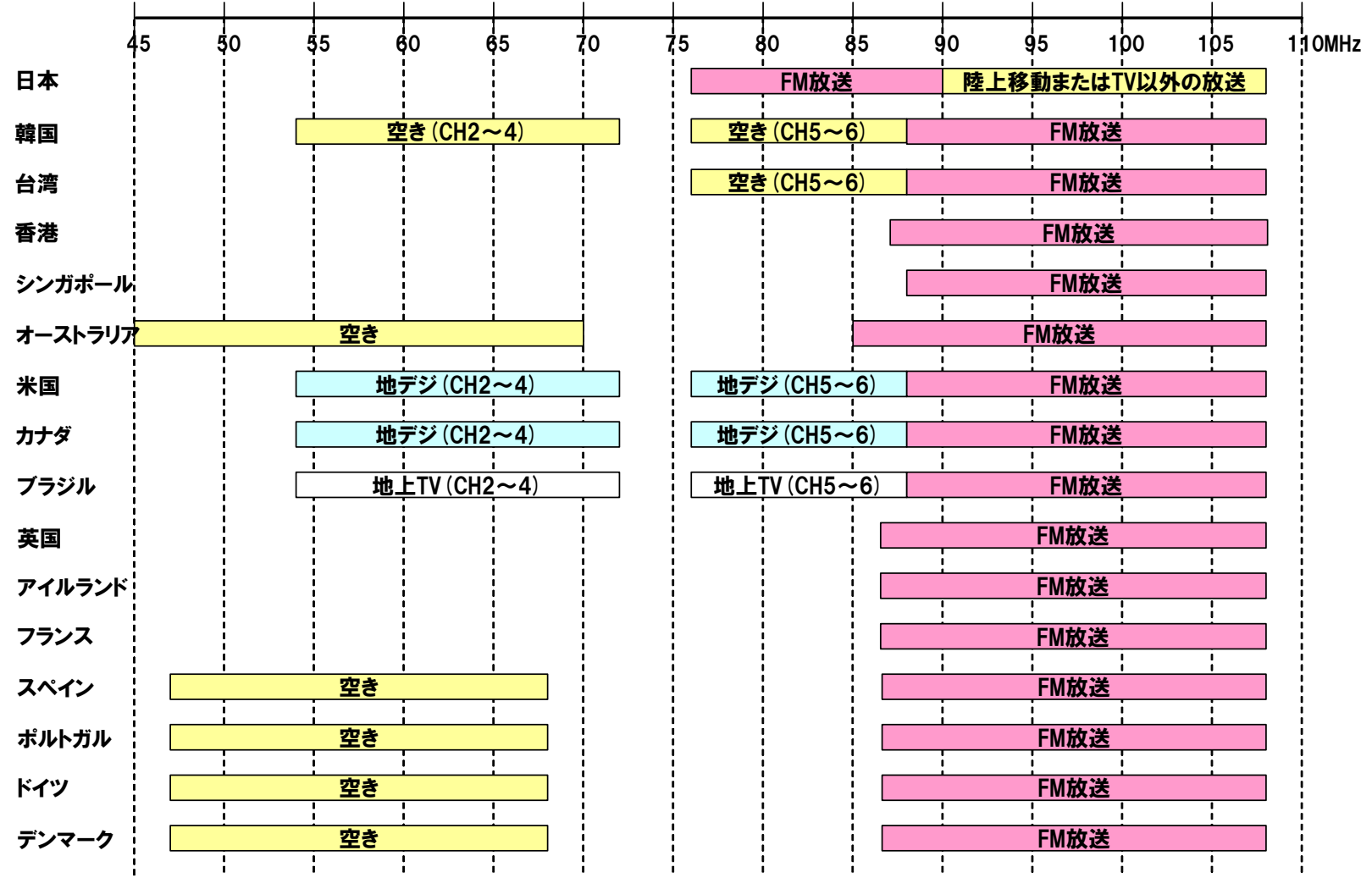
今回の懇談会の「冠」にある携帯端末 = 代表格：携帯電話
携帯電話 = グローバル・ローミング端末
携帯電話に搭載される放送受信機能は、特定の国だけでしか使えないものであって良いのか？



どうせ、頑張るならば、世界中どこに行っても使えるものにするために最大限の努力を行うべき

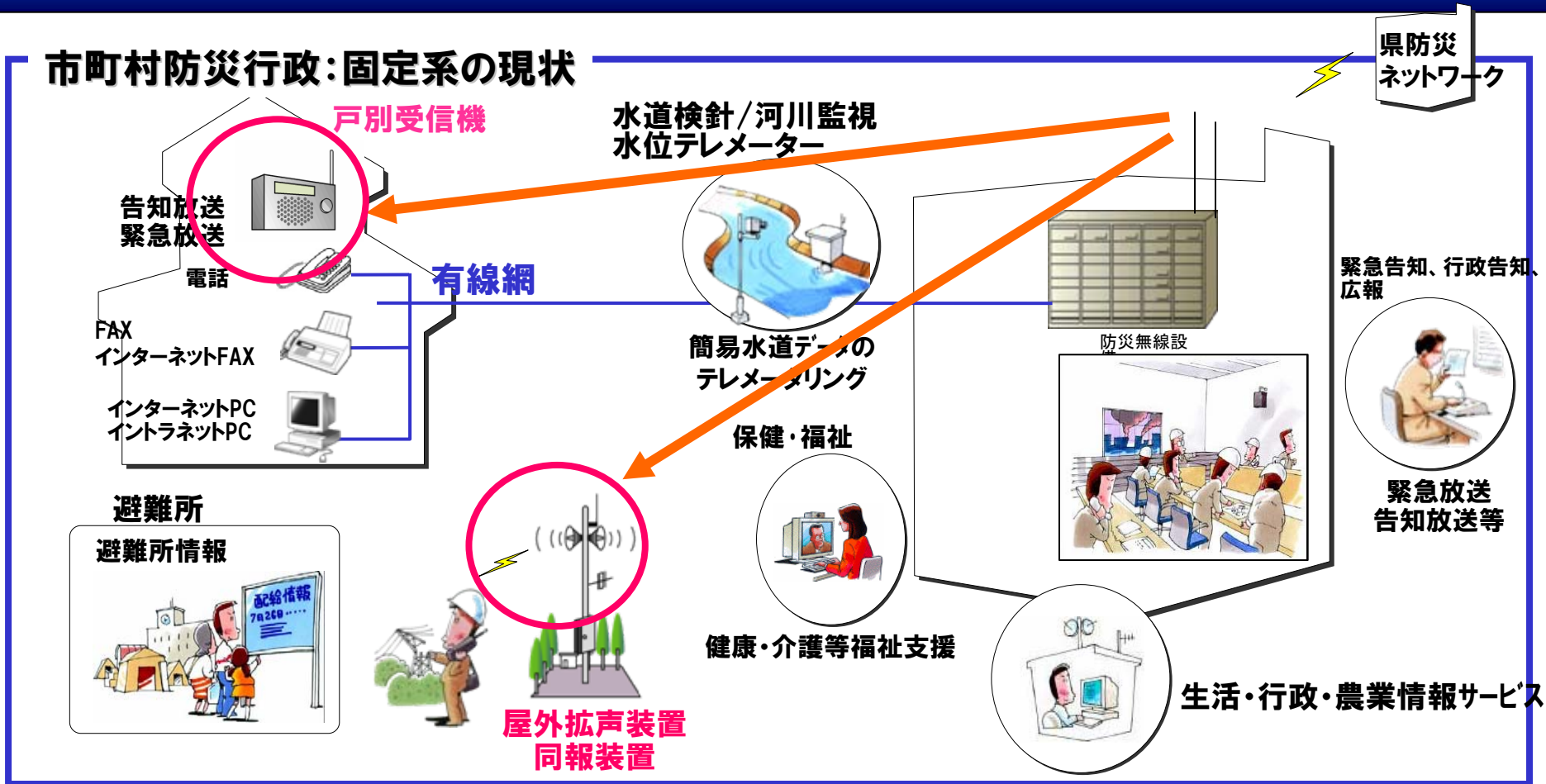
1. ICT国際競争力施策との整合性 **世界の周波数利用状況**

VHF1～3CHは、国際的にはFM放送帯域となっている
FM放送もいずれはデジタル化されることを想定すれば巻取りを視野に!



2. 経済性 携帯端末から見て望ましい方式とは？

- 1セグ受信機能端末販売台数500万台超（業界全体）
- ISDB-T技術の進化及び低価格化モジュールの普及が加速
- ISDB-TsbまたはISDB-Tmmであれば1セグの技術ファミリー
- 今後、1セグの更なる展開を考えると、1セグ連結等の類似技術の展開が想定され、利用者のコスト負担を考えると共通技術の展開が望ましい（技術的には周波数面で決して楽ではない）
- 携帯電話では、3G及びGSMで既に多大なロイヤリティを負担
新方式採用による更なるロイヤリティの負荷は懸念がある
- 併せて、生活必需品となった携帯端末で、安心・安全に関わる
情報報知は、国民の生命・財産を守る上で極めて有効



防災固定系は、60MHz帯FM変調方式が主流

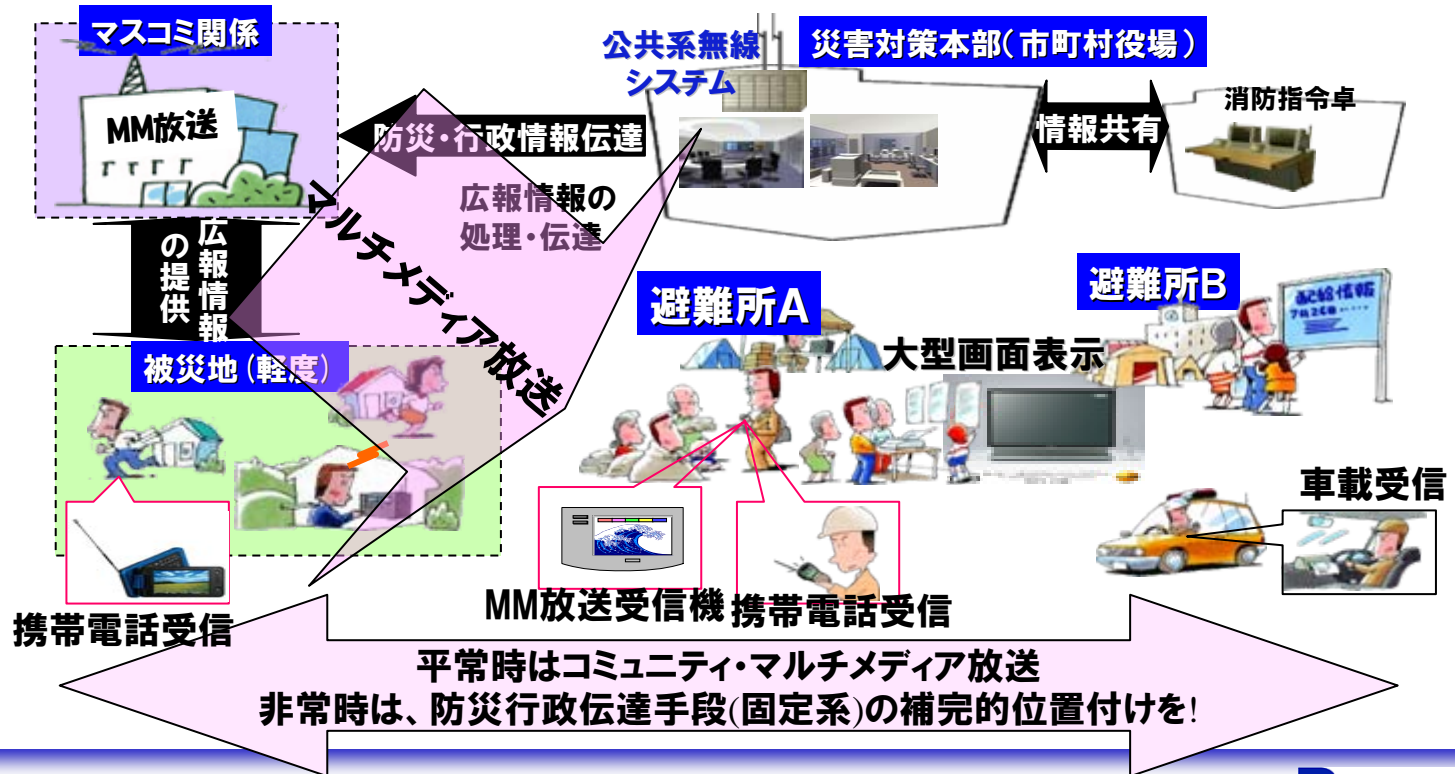
拡声放送は、うるさい、聞こえない。個別受信機は、高いとの課題あり。

昨今の状況を考えると携帯で誰もが受信できることが必須。

(同報普及率:70%程度, 戸別受信機導入率:20%程度)

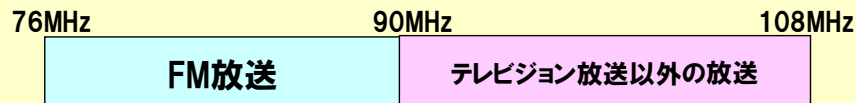
3. 国民の安心・安全への寄与 マルチメディア放送に期待

- デジタル放送への移行により、移動体で安価に高品質な映像・音声を享受できるような社会の実現は画期的
- 最も期待するのは、コミュニティ型放送や市町村防災行政無線の補完的役割を果たすことにより、地域の活性化・自立化に寄与
- 特に、防災情報伝達等の機能は、世界的にも共通の課題であり、訴求ポイントとして有効



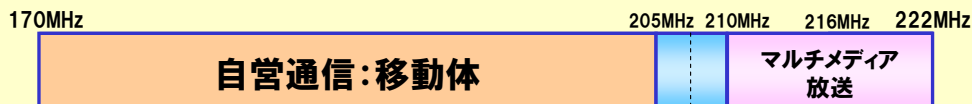
4. 周波数の有効利用 周波数割当方策への提言

- 前述の通り、VHF-L帯は地方の活性化を考慮し、市町村自治体を中心としたコミュニティ型マルチメディア放送帯域とすることが望ましい
- 国内のFM巻き取りは勿論、世界のFM巻き取りを視野に入れた展開を期待



市町村自治体を中心とした
コミュニティ型マルチメディア放送帯域

- VHF-H帯は自営通信とのガード帯域をできるだけ解消する方策の検討が必要
- 業態を超え、通信・放送の垣根を越えた融合の姿を模索すべき（施設の共同利用や業務委託などの検討）
- VHF-L帯との棲み分けを考え、H帯は全国放送型または地方広域型放送事業用帯域と位置づけることも一考



全国放送または首都圏、近畿圏等の
広域圏型マルチメディア放送帯域